

## コラム グレート・オーサーの国際性(2) 語学力

グレート・オーサーたちは、前のコラムでみた海外体験、そして原書を読まなければ最新知識が得られない当時の状況から、外国語に堪能な人物が多いのが特徴です。彼らの著作活動そのものが外国語と密接に結びついていることも見逃せません。

例えば、内村鑑三の『余は如何にしてキリスト信徒となりし乎』、『代表的日本人』、新渡戸稲造の『武士道』、岡倉天心の『東洋の理想』、『茶の本』、そして鈴木大拙の『禅と日本文化』、これら近代の古典とっていい著作は日本語で広く読まれています。実は私たちは彼らの日本語を読んでいてのではありません。これらはすべて英文著作であり、日本語版には原著者とは別の訳者の手になる訳文が収められています。内村鑑三は当時の新聞『万朝報』の英文欄主筆を務めていましたし、新渡戸稲造は英語のみならず留学先のドイツで独文の博士論文を書いて学位を得ました。岡倉天心は主著というべき単行本4冊がすべて英文著作であり、鈴木大拙も主著を含む英文著作が30点以上あり、その学識は「世界の Suzuki」として国内よりむしろ海外で高く評価されています。

この4人を上回るほどの語学力を持っていたといわれるのが、「知の巨人」といわれる南方熊楠であり、彼もその民俗学と粘菌学の論文の多くを英語で書き、英語以外の諸国語にも通じていたそうです。戦後のグレート・オーサーでは、中村元と井筒俊彦が東洋や中東の諸語を含む多言語に通じ、特に井筒はある時期には30以上の言語を習得していたという驚異的な語学力を誇ります。

ところで、外国語で著作を発表できるのは自分の思想を海外に広めるだけでなく、日本というものを海外に発信する有効な手段でもありません。事実、上記の『武士道』、『茶の本』、『禅と日本文化』などは日本の伝統文化を世界に知ら

せる役割をいまも果たし続けています。また、清沢満之の『宗教哲学骸骨』や西田幾多郎の著作は本人の手になるものではないにしても英語その他に翻訳され、その独自性に注目が集まっています。さらに、鈴木大拙による仏典や『教行信証』の英訳、南方熊楠による『方丈記』の英訳など、グレート・オーサーの語学力は大きな仕事を残しました。

語学力はまた発信と並んで重要な受信装置です。西洋の学問と思想に学ばなければならなかった明治初期、福沢諭吉、西周、中江兆民は翻訳者としても活躍しました。特に中江のルソー翻訳は自由民権運動に大きな影響を与えました。この系譜は、幸徳秋水、大杉栄にも引き継がれ、クロボトキンなど無政府主義の文献が翻訳されています。偉大な発信者であった鈴木大拙は、ヨーロッパの神秘主義者スウェデンボルグを翻訳して日本に紹介した人物でもありました。

昭和になってからも、小林秀雄のランボー、渡辺一夫のラブレール、林達夫のヴォルテール、福田恆存のシェイクスピア、竹内好の魯迅など、いずれも定評のある翻訳が生み出されています。また、文学以外でも、大塚久雄によるマックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、清水幾太郎によるE.H.カー『歴史とは何か』の翻訳は、それぞれロングセラーとして名高い本です。さらに特筆すべきは、中村元の仏典と井筒俊彦のコーランの訳業です。これらは質量ともに、それ自体がグレート・ワークスとっていいほどの業績であり、高い評価が与えられています。

日本語への翻訳の仕事は著作集に入らないことが多く、ともすれば見落とされがちですが、これもグレート・オーサーの国際性を示すものといえるでしょう。

参考文献『英語達人列伝』

(斎藤兆史著 中央公論新社)